富岡製糸場と深谷の偉人たち

富岡製糸場は 1872 年（明治５）に明治政府が製糸業の近代化を図るために設立した官営模範工場で、木骨煉瓦造の特色ある建物群が 140 年以上経った現在もほぼ建設当初のまま保存されています。政府から民間に払い下げられた後、主要な建造物群はそのまま活用する一方、建物や構造物の増改築をしながら 115 年間生産活動を続けました。操業停止後の 2005 年（平成 17）に国史跡、2006 年 (平成 18）に設立当初期の 9 件の建造物が国重要文化財に指定されました。

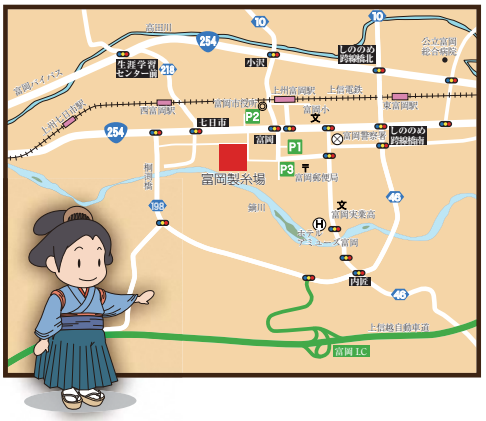
富岡製糸場の設立には、渋沢栄一、尾高惇忠、韮塚直次郎など現在の深谷市出身の方がさまざまな形で尽力されました。

[富岡製糸場が果たした役割]

富岡製糸場は官営模範工場として日本各地に器械製糸技術を伝えるとともに器械製糸場の設立を進める役割を果たしました。また、富岡製糸場で生産された生糸は当初はフランスへ、やがてアメリカへと輸出され、明治末期には日本は生糸の生産量・輸出量ともに世界一となり、世界的な絹の大衆化に貢献したと考えられます。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質な生糸の大量生産に貢献した、19 世紀後半から 20 世紀の日本の養蚕・製糸の分野における世界との技術交流と技術革新を示した絹産業に関する遺産です。

日本が開発した生糸の大量生産技術は、かつて一部の特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、その生活や文化をさらに豊かなものへと変化させました。



■お問い合わせ
富岡製糸場　〒370-2316　群馬県富岡市富岡１番地１
TEL：0274-64-0005　FAX：0274-64-3181

東繭倉庫

[設立の背景]

江戸時代末期に幕府は鎖国を解き外国と交易を開始し、1859 年（安政６）に横浜などを開港しました。その当時主な輸出品として生糸と蚕種の需要が急激に高まりましたが、そのころの日本は伝統的な手動の繰糸法である座繰製糸であったため、良質な生糸を大量生産できず、粗悪品やにせものを輸出し、不当な利益を得ようとする商人たちが増えて問題となりました。

このような問題に対し諸外国から強い不満が出され、さらに外国資本導入の動きもありました。こうした問題を解決する目的で政府資本による模範器械製糸場の設立が 1870 年（明治３）２月に決定されました。

[建設地の選定]

政府は生糸に精通したフランス人ポール・ブリュナに製糸場建設のための「見込書」を提出させ、その後彼を指導者として仮契約を結びました。ブリュナらは当時養蚕が盛んであった長野、群馬、埼玉の各地を実地踏査した結果、製糸に必要な繭と良質な水だけでなく、工場建設に必要な広い土地、近くで蒸気エンジン用の燃料である石炭が確保できたことなどから、群馬県富岡の地が選ばれました。

[設立に関わった人々]

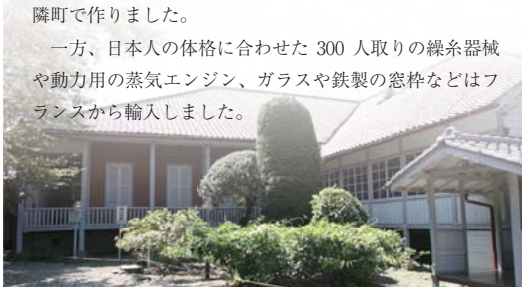
器械製糸場設立の緊急性を感じた大隈重信、伊藤博文の協議により官営模範製糸場設立が決まりました。当初は民部省が所管し、渋沢栄一や杉浦譲、尾高惇忠などが担当し、中心的役割を果たしました。

設立の指導者としてポール・ブリュナと雇入れの本契約を結び、また建物の設計のために横須賀製鉄所の製図工だったオーギュスト・バスティアンを雇入れました。その他に生糸検査人、技術者、繰糸教師、医師らがブリュナの人選によってフランスから雇入れられ富岡製糸場の設立や操業に関わりました。

ブリュナ 一行

建築資材は日本で調達できない一部の資材を除き現地で調達されました。木材や礎石は近隣の官林や山から切り出し、煉瓦はフランス人指導者の指導のもと瓦職人が隣町で作りました。

一方、日本人の体格に合わせた 300 人取りの繰糸器械や動力用の蒸気エンジン、ガラスや鉄製の窓枠などはフランスから輸入しました。



[活躍した工女たち]

錦絵「工女勉強之図」

1872 年２月より工女募集が行われましたが、「フランス人が工女の生き血を採って飲む」という噂が流れるなど、順調に集まりませんでした。政府は「告諭書」を何度も出すとともに、初代場長の尾高が娘の勇を率先して入場させた結果、工女は官営期だけで 32 道府県から集まりました。

官営期当初の富岡製糸場で働く工女の生活は、労働時間は季節により異なりますが、1 日平均 7 時間 45 分で日曜は休み、給料は繰糸技術の等級により格付けされた月給制、また宿舎や病院が場内にあり、食費や医療費は国が負担するなど当時の日本では極めて進歩的な労働環境でした。多くの工女が技術習得後は故郷に戻り指導者として活躍し、器械製糸技術を伝え広めました。

[建物の特徴と価値]

官営当初期に建設された主な建物は木の骨組みの間に煉瓦を積み上げ壁を成す木骨煉瓦造で建てられています。小屋組みにはトラス構造が用いられており、繰糸場には中央に柱のない大空間が出現しています。また、当時の日本はまだ照明設備が不十分であったため繰糸場にはガラス窓を多用することで自然光を最大限に利用しました。明治初期に造られた木骨煉瓦造建築で大規模なものとしては、日本で唯一完全な形で残るものです。

渋沢栄一（しぶさわえいいち）

1840 年（天保 11）.2.13 ～ 1931 年（昭和 6）.11.11

「近代日本資本主義経済の父」と呼ばれる渋沢栄一は、現在の深谷市血洗島に生まれました。7 歳の頃から、いとこの尾高惇忠に論語をはじめとする学問を習いました。

20 代で栄一は、惇忠らと倒幕計画を試みましたが、大激論の末、計画を中止します。その後、京都へ逃れ一橋（徳川）慶喜の家臣となり、領内の経営面で力を発揮します。慶喜が 15 代将軍の座につき、意に反して幕臣となりますが、慶喜の勧めで、1867 年（慶應 3）1 月、慶喜の弟、徳川昭武に随行して渡欧し、約 2 年間、ヨーロッパの思想・文化・社会に大きな影響を受けました。1868 年（明治元）11 月、幕府が倒れたため帰国、1869 年（明治 2）11 月、一度は断ったものの、大隈重信に説得され明治新政府に仕官します。

明治初期、日本最大の輸出品であった生糸生産のための模範工場を政府自らが、富岡の地に建てることになりました。富岡製糸場設立にあたっては、当時、明治新政府の大蔵少輔であった伊藤博文と大蔵省租税正の栄一が担当となり計画が進められました。農家出身で蚕桑に詳しかった栄一は、富岡製糸場設置主任として尾高惇忠、韮塚直次郎らと共に建設に尽力しました。

富岡製糸場が操業を開始した翌年の 1873 年（明治 6）、34 歳の時、栄一は大蔵省を退官し、以降、実業界で大きな功績を残していくこととなります。第一国立銀行をはじめ、設立に関わった企業は 500 余に及びます。また、社会福祉事業にも熱心で、東京市養育院の設立をきっかけに数多くの病院や学校づくりに尽力するなど、600 以上の社会福祉事業に関わりました。さらに、国際親善にも寄与し、世界中の人々と幅広く交流しました。

旧渋沢邸「中の家」（深谷市指定文化財）

尾高惇忠（おだかじゅんちゅう）

1830 年（天保元）.7.27 ～ 1901 年（明治 34）　　.1.2

（渋沢史料館所蔵）

尾高惇忠は、現在の深谷市下手計に生まれました。学問に優れており 17 歳の頃、自宅で尾高塾を開き、近隣の子どもたちに学問を教えました。いとこの渋沢栄一の師でもあり、その考えに大きな影響を与えました。栄一は後年「藍香（惇忠）ありて青淵（栄一）あり」と述懐しています。惇忠は 10 代で水戸学に感化され尊王攘夷思想を抱くようになり、高崎城乗っ取り計画や横浜商館焼き討ち計画を栄一らと共に企てますが、やがて、栄一が徳川慶喜に仕えるようになると、佐幕派（幕府を補佐する）へと考え方を変えていきました。

1869 年（明治 2）12 月の「備前渠取入口事件」では、地元農民の先頭に立ち、事件解決のため同志と共に、この事件の解決を見ました。これが縁で新政府に招かれ、民部省に入ります。そして、官営富岡製糸場の建設に計画当初から携わり、活躍します。建設資材の煉瓦やモルタルは、当時の日本ではほとんど知られていませんでしたが、地元深谷の韮塚直次郎に煉瓦づくりを、煉瓦を接着するためのモルタルは、日本固有の漆喰を改良してまかなうことを考え、同郷の左官職人、堀田鷲五郎・千代吉親子に考案を任せました。富岡製糸場の煉瓦積みは、この漆喰によって長年にわたり強固な壁面を形成しています。また、娘の勇を伝習工女第 1 号として故郷下手計から呼び寄せました。富岡製糸場初代場長となり、特に工女の教育に重点を置き一般教養の向上をはかり、風紀の乱れには厳しく場内の規律を維持したそうです。惇忠の誠実な人柄に人々は信頼を寄せ、自分の娘を富岡製糸場の工女の一員とすることが誇りであると考えるようになりました。「至誠神の如し」とは、たとえ能力や才能がなくても、誠意を尽くせば、その姿は神様のようなものだという言葉です。惇忠はその言葉を掲げ、1876 年（明治 9）に場長の職を退くまで、富岡製糸場のために誠意を尽くしたのでした。

尾高惇忠生家（深谷市指定文化財）

韮塚直次郎（にらづかなおじろう）

1823 年（文政 6）.10.5 ～ 1898 年（明治 31）.1.27

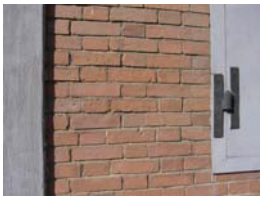
現在の深谷市明戸出身の直次郎は、富岡製糸場の建設において資材調達のまとめ役をつとめた人物です。製糸場は洋式の建物となることが決まっていましたが、明治時代となって 4 年あまりの当時ですから、それがどんな建物なのか、想像することも非常に困難なものだったことでしょう。主要な建築材料となる煉瓦も、まだその製造方法すら分かっていない中、直次郎は地元明戸の瓦職人たちを束ね、外国人技師バスティアンから煉瓦の素材や性質を聞き、材料である粘土探しからはじめました。そして、富岡に近い笹森稲荷神社（現甘楽町福島）付近の畑から煉瓦に適した粘土を発見し、その周辺に焼成窯を設け、試行錯誤の末に、煉瓦を焼き上げることに成功したのです。

その他にも、石材の輸送や瓦など、多くの資材調達を請け負った直次郎は、製糸場完成後の1875年(明治８)、笹森稲荷神社の本殿に縦 5 尺横 10 尺の大絵馬を奉納し、事業の成功を神に感謝しています。製糸場を東上空から見下ろした構図の絵馬は、甘楽町指定重要文化財となっています。

直次郎は、1880年（明治 13）に永明稲荷神社（深谷市田谷）にも同様の絵馬を奉納しており、これは深谷市の指定文化財となっています。

富岡製糸場図大絵馬（深谷市指定文化財）

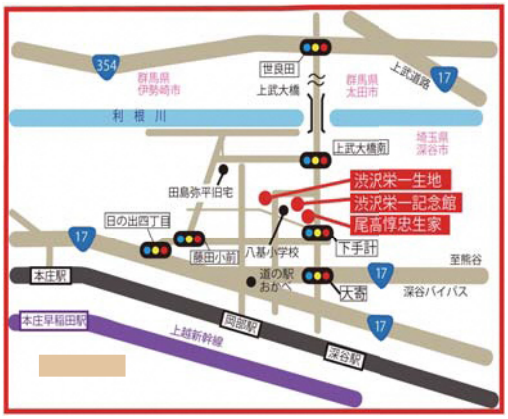
刻印の入った煉瓦



フランス積み煉瓦

■お問い合わせ
深谷市教育委員会　渋沢栄一記念館
〒366-0002　埼玉県深谷市下手計1204
TEL：048-587-1100
FAX：048-587-1101

尾高勇（おだかゆう）

1858 年（安政 5）頃～ 1923 年（大正 12）.1.30

尾高惇忠の長女として1858年（安政 5）頃、現在の深谷市下手計に生まれました。1872 年（明治 5）14 歳の勇は、製糸伝習工女の第 1 号となります。その背景には、製糸場の操業に向けて工女を募集したものの、工女の募集は生き血を絞るためという噂のため、一向に応募者が現れなかったという事情がありました。ことの次第を聞いた勇は、父の心中を察すると共に、新たな技術の習得に胸を躍らせて富岡製糸場への入所を決めたのでした。勇の決断は同じ下手計村の少女たちを刺激し、松村倉（17 歳）をはじめ 5 人の少女が、さらに倉の祖母和志は 62 歳の高齢ながら志願して入場し、工女取締役となりました。